核兵器のない地球へ　歴史の流れ

二〇二一年一月二二日は世界の歴史が大きく変わった日、なぜ？　この日から核兵器が国際法上「**違法**」となったから！　その流れはどんな流れか考えてみたい。

「一月二二日にはなにかしたいね」。九条の会の人たちが話し合い、市役所前のスタンディングをみんなに呼びかけることにした。

２０２１　１、２２　核兵器禁止条約　発効！

唯一の被爆国　日本の参加を　求めよう！　　太平山麓九条の会

長さ一㍍八〇幅九十にこの文字を入れて横断幕を発注、一日集まってステッカーを手作りし、自分で作ってる人には持って来てもらおうと決めた。

当日、市役所前に行くと、Ａ３の色彩豊かなすてきなステッカーが四種何枚もできていた。一枚もらって並ぶ。横断幕をもつ人、ステッカーをもつ人、ずらっと市役所前に並び、道の向こうの宣伝カーの隣では、手づくりの大きな横断幕を持って立っている人。「あッ、にじッ」、みんな上を見上げた。市役所のビル屋上わきに丸く虹の一部が見えている。雨も降らないのに、しかも上に丸く出る虹、珍しい。「条約発効を祝福しているよう」、だれかがいう。反対東側の青空に昨夜上弦だった月が白く浮かんでいる。

一九四五年八月六日、九日広島と長崎に原爆が落とされ、十五日ポツダム宣言を受諾、降伏したとき、私は中学三年。原爆は「特殊爆弾」と報道され、昭和天皇の「終戦詔書」に「敵ハ新ニ残虐ナル爆弾ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ惨害ノ及ブ所真ニ測ルベカラザルニ至ル」とあったが、被爆した広島、長崎の市民の姿は国民に知らされなかった。

占領下ではＧＨＱの「プレスコード」で、アメリカに都合の悪い報道は制限され、原爆被害は報道できなかった。一九五二年四月二八日サンフランシスコ平和条約発効。報道の自由が回復されたとき、最初に原爆被害を報道したのは**アサヒグラフ八月六日号「原爆被害の初公開」特集号**だ。あまりにも衝撃的な被爆者の姿だった。ひとりひとり人格を持った人間だ、大勢の前に晒していいのか、アサヒグラフ編集部は締め切り間際、編集長以下全部員が深夜まで討議に討議を重ね、最後に「このむごたらしさを余すところなく世界の人々に見せよう」という飯沢匡編集長の一言で公開に踏み切ったという。

「この特集号に掲載された写真は、広島・長崎の被爆者の悲惨さを真正面から見据えたものとして、各方面に異常な衝撃を与えました。この号は４回にわたって増刷を行い、当時としては異例な70万部という大部数を発行しました」。

「発行後の反響は大きく、特に日本ペンクラブによる『全世界にアサヒグラフを送れ』運動が起こり、英文解説を添えて多数のアサヒグラフが海外に送られました」。「ヒロシマ」を書いたアメリカの作家ジョン・ハーシーは、「訳者の相島敏夫氏にあてに『被爆者の戦慄すべき写真を見て、何をおいても平和への努力が大切だということを、改め

て知らされた』と書き送ってきたということも伝えられています」（82年アサヒグラフ）。

私はこの70年も昔のハーシーの言葉を読んで、禁止条約の前文に書かれた「**核兵器使用の被害者（ヒバクシャ）および核実験の被害者にもたらされた容認しがたい苦難と損害に留意し**」という言葉を改めて重く感じた。被爆者が「戦慄すべき姿」を全世界にさらけ出し語り続けた長い長い運動がとうとうこの核兵器禁止条約を実現したのだ！

このアサヒグラフが出版された年、私は工学部の四年生、薬学部の辻章夫君に誘われて川崎市古市場にあった東大川崎セツルメントで子どもたちの算数の勉強を見ていた。夏休みには実習があるが、実習先にはセツルに通いやすいよう川崎市の音響メーカーを選んだ。グラフが出版されたとき、セツルの学生たちの行動は素早かった。グラフを二冊買い求め、ばらしてベニヤに貼りつけ、地域の人たちに一人でも多くこの写真を見てもらおうと、小さな「**原爆展**」を計画したのだ。

私は案内のビラまきを担当した。真夏の板葺き平屋長屋の社宅、開け放ち上半身はだけてうちわを使っているおばあちゃんにビラを渡して「見に来てください」と話す。生まれて初めてのビラまき、長屋の一軒一軒間違わないようにビラをおいていく。ああ、ここから私のビラまき人生がスタートしたといま思う。

せっかく手製パネルをつくったのだから、川崎駅前でやろうと話は発展し、通勤帰りの労働者でごったがえす「川崎駅前原爆展」をやってしまった。向こうから見覚えのある連中がゾロゾロ来る、「やあ、なにやっているんだ」、ついこの間まで実習していた職場の人たちだ。みんな見ていってくれた。目の前が駅前交番、お巡りさんは何も言ってこなかったので、緊張していた学生たちはホッとした。

栃木に来てしばらくしたとき、アサヒグラフがこの歴史的な八月六日号を再録すると知った。私はこの歴史的な文献を手元に置きたいと思って当時栃木市でいちばん大きかった大塚書店に買いに行ったが品切れ、増刷されるというのでもう一度書店を訪れて手に入れた。**アサヒグラフ増刊１９８２・８・１０　原爆の記録総集編**　その82ページから106ページまでに、一まわり小型の**８月６日号**１９５２の表紙を含め全ページが収まっていた。表紙は広島の平和大橋の前に立つ女性、風変わりな欄干彫刻をもつ橋の設計者はイサム・ノグチ、当時平和希求のシンボルだったと解説されていた。絵本館にある。

いま原爆展はさまざまな形で行われている。栃木市でも八月には市が行う。しかし日本ではじめて行われたのは、ささやかな「俺たちの街頭原爆展」だろうと密かに誇りにしていたが、隠された歴史が何年もかかって表に出てくる。

一九九五年「占領下の原爆展」という本が出版された。えっ、占領下！　平和条約発効前だ。「**占領下の「原爆展」**平和を追い求めた青春」（小畑哲雄かもがわブックレット）、気になりながら本棚にねむっていた六〇ページの本に出番が来た。

一九五一年七月、京都駅前の丸物百貨店（現京都近鉄百貨店）で京大同学会（京大全学

学生自治会）主催の「綜合原爆展」が開かれ、その後各地で様々な形の原爆展が行われた。五一年七月というと、一月、吉田・ダレス会談で対日講和に向けた直接交渉がはじまり、九月、サンフランシスコで平和条約が結ばれたという最中だ。私はこの原爆展を知らない、世の中からも忘れ去られていた。九一年につくられた『原爆展』掘り起こしの会」が文字通り掘り起こした貴重な記録がこのブックレットだった。

展示内容は当時発表されていた丸木夫妻の「原爆の図」にはじまり、峠三吉など原爆をあつかった文学作品を**文学部**、熱線・爆風の図解を**理学部**、人体に及ぼす影響を**医学部**。植物に対する影響を**農学部**、原爆の原理を**理学部**、建築物への影響を**工学部**、原爆禁止運動と原子力の国際管理を**法学部**、原子力の平和利用を**理学部**、さらに科学者、宗教者の声など、写真、図入りで一八〇枚あまりのパネルが各学部の学生たちによって作られ、新日本建築家集団が展示計画にかかわり、工学部建築学教室の西山夘三助教授がパネル製作を直接指導。京大あげての原爆展ではないか。驚いた。

京大は原爆投下後、教授と学生を広島に送り、原爆被害の調査、研究、診療にあたった。調査研究の資料を占領開始でアメリカ軍が押さえ発表禁止、医学部天野重安助教授のところにリーボウ中佐（のちにエール大学教授）が来て提出を強硬に求めたが、要求に抵抗、標本類の一部を巧みに残すことに成功、原爆展にも天野先生が大きく貢献した。「綜合」（当時使った漢字）という意味がよくわかった。専門分野を生かし京大全体の力で「総合的な」原爆展を成功させたのだ。同世代の僕らに想像できない世界だった。

綜合原爆展は六〇年世界平和協議会から「平和賞」を贈られた。記念したパンフレットに湯川秀樹が一文寄せている。「わが国に於いて核兵器反対の運動が本当に国民的な規模でさかんになったのは、ビキニ以来のことであったと思う。それ以前の運動は、国民全体のものであったというよりも、むしろ先駆的な動きといえる性格のものであった。それは熱意と勇気ある人たちの運動であり、その意味において京大同学会が一九五一年原爆展を行い、地味な形でおし進めていったことは立派だと思う。この先駆者的な意義をもち、しかも地味で目立たぬ一つ一つの努力のつみかさねがビキニ以後の全国民的な運動を促進し、つよめることになったといえるだろう。…」同パンフで末川博立命館大元学長が「…学生運動の中にあって、原爆展の開催は、大地に足をふまえた形の運動であって、今日もなお、高く評価されてよいと考える。…」と書いた。これ以来中原爆展、小原爆展、パネル一枚持って歩くなど行われたが、さまざまな弾圧にも会う。著者小畑さんは模造紙二枚もって集会に行き一週間拘留され、綜合原爆展の閉幕にたちあえなかったという。全国、世界のさまざまな取り組み、小さな無数の流れが、やがて核兵器禁止の大河になる、この流れはもはやアメリカも中国もいわんや菅さんにも押しとどめることはできない。歴史はいよいよ「地球からすべての核兵器をなくす」最終盤に入ったのではないだろうか。最終盤の幕が上がった一月二二日ととらえたい。

半藤一利さんの遺言　焼けあとのちかい

先月、編集者で昭和史などのノンフィクション作家半藤一利さんが亡くなった。半藤さんの本は庶民の目で見た昭和史というが、二〇一六年、さらに庶民の生活に踏みこんだB面昭和史を書いた。私の生きた時代を書いている。これはなんとしても読みたい。小山街道のツタヤに、買う本があるという孫の真優と行った。「これでしょう」。真優はすぐ見つけて教えてくれた。年取ると見つけるのが下手だ。約六〇〇ページの大著だ。いま日本近現代史を学んでいるから、このとき以来B面にはお世話になっていて、半藤さんとも仲良くなれたと思ったのに！

半藤さんの盟友やはりノンフィクション作家保坂正康さんは朝日新聞「半藤一利さんを悼む」のなかで、記憶に残るエピソードとして、「１９８９年にベルリンの壁が崩壊した後、奥さんと一緒に壁を見に行ったそうだ。壁の前に立ったとき、体が自然と能の舞を始めた。すると、周りに人だかりができて、終わったら拍手が起きた、と。『恥ずかしくなかったの？』と僕が聞いたら、『うれしくてね』。東西冷戦が終わったという感慨の大きさをうかがい知った」と書いている。すてきな文章だ。

奥さんというのは漱石の孫だ。私にはこのときの半藤さんの気持ちが痛いほどわかる。僕らは47年に旧制中学五年生、48年は旧制高校一年（半藤さんは浦和高、私は東京高）、49年から東大教養学部（半藤さんは文科、私は理科）、この間に連合国は東西に分裂、日本は西側に組み込まれ、ドイツは冷戦下米英仏の占領区とソ連の占領区に分断される。東ドイツにあった首都ベルリンは街が東西に分割され、東側が壁を建設、無数の悲劇が生まれた。陸の孤島となってしまった西ベルリンには西側が物資を空輸した。

日本の植民地だった朝鮮半島は米ソが占領、冷戦でそのまま固定化二分されただけですまなかった、スターリンの戦略で熱い戦争（朝鮮戦争）になり（不破哲三「スターリン秘史」が解明している）、何百万もが犠牲になった。すべて、東西対立、分断が生んだ悲劇だ。こんな時代に生きてきた僕ら。対立の象徴が民衆の手で壊される。壁の崩壊でわき上がった感情、ベルリンまで夫婦で行って能を舞って表現してしまう半藤さん！

半藤さんは保坂さんと「今の憲法を１００年もたそう」と二人だけの運動をやっていた。たしか「百年もたす」ことができれば、もう壊されないだろうと言っていたようだ。二人でそれをやるんだと言っていたのに！

半藤さんにはたくさんの著書があるが、絵本を一冊だけ描いている。前に紹介した。「焼けあとのちかい」（塚本やすし絵　大月書店）だ。半藤さんが亡くなり、絵本が半藤さんが私たちに残した遺言だと思った。東京下町で三月十日の東京大空襲を体験した中学生半藤さん、四〇歳ごろまで誰にも話さなかったという苦い体験を絵本にそのまま描いた。日本は絶対勝つと教えられた僕ら、二度と「絶対」を使わないとちかった半藤さんが、いまあえて「絶対」を使う。**「戦争だけは　絶対に　はじめてはいけない」**